

広がるパフォーマンス志向と消費トレンド

「ChatGPT」を手掛ける OpenAI が一般に提供を開始して約 1 年半が経過する。日本においては、仕事における利用が進んできているが、後述のアンケート結果のように、仕事以外（プライベート）での利用率は 20% とまだ低い。

一方、アメリカにおける仕事以外での利用率は日本の 2 倍以上となっている。下図は、セントルイス連邦準備銀行、バンダービルト大学、ハーバード・ケネディスクールの共同研究チームが実施した調査結果であるが、生成 AI ツールの利用は、仕事での利用より、仕事

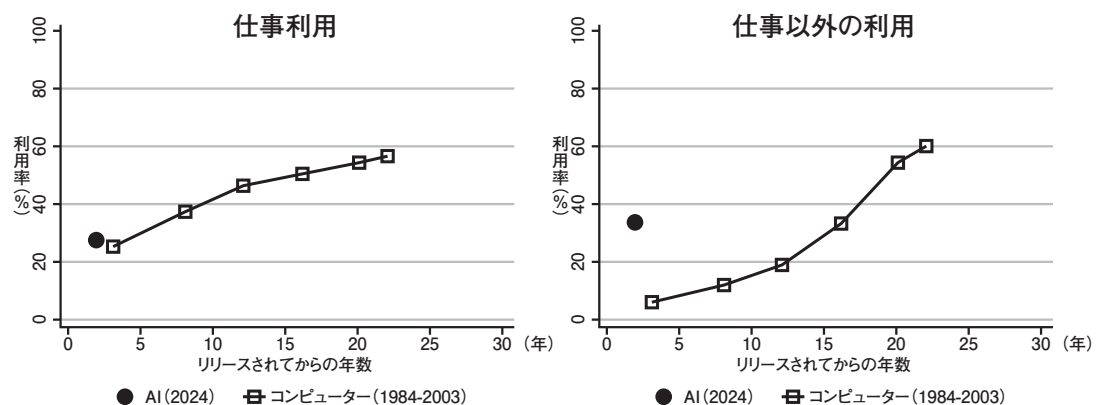
以外の利用の方が多い。また、PC の普及と比較すると、仕事での普及率に大きな違いはないが、仕事以外では、PC より極めて早いスピードで普及が進んでいる。

それでは、アメリカにおいて、仕事以外では、どのようなことに、生成 AI ツールが使われているかという点、たとえば

- ①子どもの学習サポート
- ②家事の効率化

（レシピ提案、掃除方法などのアドハイス）

■図表 生成 AI ツールの利用率



出典：セントルイス連邦準備銀行、バンダービルト大学、ハーバード・ケネディスクールの共同研究

③エンターテインメント

(クイズやゲームの作成など)

④健康管理

(運動メニューの提案など)

⑤家庭内コミュニケーション補助

(家族の会話のネタ提供など)

といったことがあるようだ。

一方、上記のような「能動的に問いかけて生活に役立つアドバイスをもらう」という使い方以外に、「生成 AI ツールが搭載されたサービスを選択する」という半能動的な利用も増えている。

たとえば、2024 年のヒット商品の 1 つに新 NISA があるが、AI 活用のロボアドバイザーより気軽に投資を始めることができるサービスがある。

たとえば、2024 年ヒット商品の 1 つに V ポイントがあるが、利用状況やアンケート回答データから嗜好に合ったパーソナライズクーポン (V クーポン) が提供されるサービスがある。

たとえば、メルカリでは、出品者に商品がより売れやすくなるような改善提案などをアドバイスする「メルカリ AI アシスト」サービスがある。

これらの AI によるサポートサービスを選択することは、結果的に AI ツールを利用していることになる。

このような生成 AI が組み込まれたサービスは今後も増加し、将来的にはなくてはならないサービスになるかもしれない。

また、能動的な利用についても、身近によく使うインスタへのメタ AI 搭載や、生成 AI が搭載された Alexa+ のリリースなど、気軽に生成 AI ツールが利用できる環境が整うことにより、仕事以外の場面での利用が日本でも急拡大していくと思われる。

自分の選択眼に、AI のおすすめ選択眼が加わった新たなパフォーマンス志向が出てくることが予測される。